

認知言語学と英語教育の接点

沖本 正憲

0. 序論

最近、認知言語学から英語教育に対するアプローチが紹介されるようになってきた。たとえば、河上(1996)は、認知言語学がいかに関文法の理解に役に立つかを図解しているし、大西・マクベイ(1996)は前置詞の具体例を動的に示している。

認知言語学は、LakoffやLangackerが中心となり、1980年ごろからアメリカ言語学界に登場してきた。この学派では、人間の認知能力が言語現象の記述や説明の基盤となっている。つまり、言葉は、認知主体である人間が外部世界を認識し、外部世界との相互作用による経験的な基盤を動機づけとして発展してきた記号系の一種だとみなすのである(山梨2000: 2-16)。たとえば、同じ坂について、「上り坂」と「下り坂」という2つの表現があるのは、認知主体が置かれている空間的ないしは心理的な位置関係および、主体の動的あるいは心的な方向性を反映しているからだと考えるのである。このように、外部世界の対象や事態は、認知主体から独立して解釈されているのではなく、認知主体の投げかける視点との関連で意味づけされている。認知言語学は、身体的な経験・感性・想像力等を反映する人間の認知能力を基盤にして、言語現象を動的にとらえていくというアプローチをとる。

本稿の目的は、この認知言語学がもたらす知見を意味論の立場から英語教育に貢献できる点を指摘することにある。第1節では句動詞を扱う。句動詞は、そこに含まれる動詞の核的な意味を中心に分析することで、その句全体の意味が理解できるということを示す。第2節では文を扱う。文の中には、人間の自然な認知の順に内容が展開されているものがある。そのような文では、人間の外界認知の方法に照らしながら拾い読みをするというやり方だけで、文解釈が容易にできることを例証する。

1. 句動詞

学習者を悩ませる問題に句動詞の種類と意味の多さがある。かつて、OgdenとRichardsが考案したBasic Englishは、850語の語数で世界共通語としての英語を確立しようとするものだったが、必然的に句動詞を多用しなければならないという宿命があった。たとえば(1)のように、学習者にできるだけ苦勞をかけないように、基本動詞を用いて多くの事態を表現しようとしたが、覚えるべき句動詞の数が多くなり、簡素化を意図した当初の企画と矛盾するものになってしまった。

- (1) a. get back at (= revenge)
- b. get on (= succeed)
- c. get behind (= support)
- d. get out (= publish)

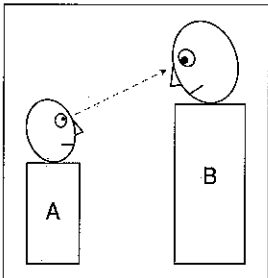
しかし、このような句動詞の世界にも動機づけられた意味があり、その意味構造を把握することで、一見複雑多岐にわたるように見える句動詞が容易に使えるようになる。以下では、lookの句動詞を考察し、意味の拡張の根底にあるその動機づけの姿を概観する。

1.1 lookのコア

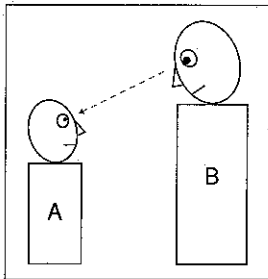
lookは「視線を向ける」ことをコア(意味の核)とし、単なる注意の喚起のときは、“Look, here comes the bus.”となるが、視線を向ける具体的な対象があるときは、“Look at yourself in the mirror.”のように、「標的/点」をマークする前置詞atを伴う。興味深いことは、視線の向け方に、私たちがしばしば心を反映するように、句動詞の意味にもそれがよく表れているということである。

1.2 視線の上下: look up to ~ と look down on ~

空間的な位置関係を表す上下は、優劣のメタファーになる (Lakoff and Johnson 1980: 14-24). 日本語の「彼は、王を仰ぎ見た」や「王は、彼を見下した」という例と同様、視線の上下と向きは英語でも「尊敬する (look up to ~)」や「軽蔑する (look down on ~)」を意味する。



(a) A looks up to B



(b) A is looked down on by B

図 1

互いに視線の向きを変えただけの図1 (a-b) では、認知的な際立ちをもつ主語Aは、Bに視線を投げたり投げかけられたりしているが、その視線がこれらの句動詞のもつ意味を動機づけていることがわかる。

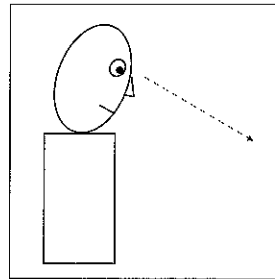
1.3 その他の look を含む句動詞

[1.2] で見た look up to ~ と look down on ~ の分析にしたがえば、他の look を含む句動詞も視線の向け方に注目することで、その意味が推測できるものがあるはずである。そこで、look for ~, look into ~, look forward to ~, look over ~ の意味を検討する。

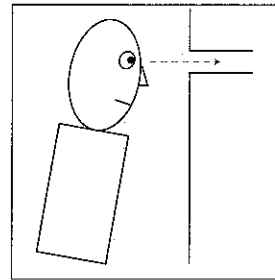
これらの語義について、学習辞典 (WP) には(2)のように記載されている。

- (2) a. look for ~ : <人・物・事>を探す, 求める, <トラブルなど>を(自分から)招く, 求める
- b. look into ~ : ~をのぞき込む, ~に立ち寄る, <問題など>を調査する
- c. look forward to ~ : <物・事>を楽しみに待つ, <~するの>を楽しみにする
- d. look over ~ : <人・書類など>を調べる, ~にざっと目を通す

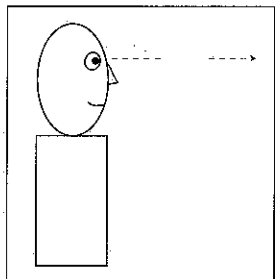
look が伴っている前置詞や副詞の意味に注意を払うと、look for ~ は「~の方向に視線を向ける」、look into ~ は「~のなかをのぞき込む」、look forward to ~ は「~に至るように前方へ視線を向ける」、look over ~ は「~の全体を見渡す」という動作を表しているはずである。それらを図で示すと次のようになる。



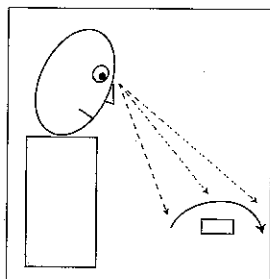
(a) look for



(b) look into



(c) look forward to



(a) look over

図2

視線をイメージ・スキーマ(image schema)とした意味の拡張を考えると、図2(a)look for ~の「~の方向に視線を向ける」ということは、「探し求める」ことに一脈通じており、同時に「求める」ことは「招く」ことにも通じる。図2(b)look into ~の「~のなかをのぞき込む」は、丹念に「調べる」様子に通じるし、家のなかの様子をのぞき見ることから「立ち寄る」の意味に拡張したとも考えられる。図2(c)look forward to ~の「~に至るように前方へ視線を向ける」は、前後という空間概念が未来・過去という時間概念に意味が拡張されるということに関係する。たとえば(3)の「前」は、すべて未来のことを表している(Lakoff and Johnson 1980: 41-45)。

- (3) a. In the weeks *ahead* of us ...
 b. I look *forward* to the arrival of Christmas
 c. *Before* us is a great opportunity, and we don't want it to pass us by.

「経路/着点」をマークする前置詞toを伴って、「希望は未来に存在するもの」というメタファーを基盤に「先のことを楽しみにする」という意味に拡張することは可能だろう。図2(a)look over ~の「~の全体を見渡す」は、Dewell (1994) のoverの考察に基づいて「基点(landmark)」に対する「軌道体(trajector)」の動きをイメージ・スキーマとして半円状に描き、その軌道全体に視線を配る姿を想像すればよい。この視線の動きが、「一通り目をとす」という意味を生むと考えられる。

以上から、look を含む句動詞が、視線の向け方に動機づけられた意味をもつことがわかった。このよ

うな動機づけに着目した教授方法は、学習者の理解を助けるすべになると筆者は考える。

2. 文

認知言語学の知見を英語教育に応用できるレベルはいろいろあると筆者は考えている。その1つとして句動詞を見てきたわけだが、次に文に目を向けることにする。

2.1 移動を表す文

人間の認知様式は、文のレベルにおいても反映されており、その典型例が移動動詞を用いた文である。

- (4) He threw the ball up into the sky.

例文(4)「彼はそのボールを空高く投げた」は、物体の物理的な移動を目で追った表現だが、読みにおいても「ボール」「上向」「空」と順に目で追って行くだけで、この文が解釈できるという点に特徴がある。なぜ、そのような読み手の目の動きに沿って容易に解釈できるのだろうか。それは、移動とは時間の経過を伴う物体の位置変化であり、移動物体・移動経路・移動時間の3要素が、表現に関係しているからである。認知言語学では、このような空間の物理的な移動を現実の時間の経過に沿って順にとらえていく認知能力に着目し、これを「連続走査(sequential scanning)」と呼ぶ。

このような走査が文に反映している例は多く見られる。

- (5) a. A black dog walked across the field, through the woods, and over the hill.
 (Langacker 1987a: 170)
 b. This street runs from east to west.
 c. The mountain range goes from north to south in Hokkaido.
 d. There is a bank across from here.

(5a)「1匹の黒い犬が、野原を通り、森を抜け、丘を越えて歩いていった」は、複数の前置詞句を連鎖することで次々に移動経路を示し、これによって「犬」の歩きの旅をとりえている。言い換えれば、それらの前置詞句に注目すれば文意を把握することができる。

同様に、心の視線も移動を表す文を生成する。(5b-d)は、移動動詞や前置詞が使われているが、主語は実際には移動していないという点に特徴がある。すなわち、発話者の主観が心的描写として心の視線となり、言語表現として顕現されているのである。これを「心的走査(mental scanning)」と呼ぶ。

(6) a. We are approaching Sapporo.

b. Sapporo is approaching.

(6a)と(6b)を対比するとその違いがわかる。それは人間を主体ととらえるか、心理の対象を主体ととらえるかの違いである。電車に乗っているとき、車窓の景色が移動しているように感ずることがあるが、(6b)はそのような経験を想起させる文だと考えられる。

2.2 視線の移動を描写した文章

時間の経過に沿って順に事態を追っていく走査を表す文は、多くの教科書に見られる。なんらかの移動に関わっている場面の記述については、この走査を意識しながら、順に拾い読みをすることでだいたいの内容を把握することができるはずである。ここでは、移動動詞は現れていないが、視線が移動している例を考察する。

(7) In the bright sunlight of the next day, the beautiful village is revealed to me. Just below the center is an impressive waterfall. The Gangotri Temple is striking in its plain gray and red simplicity. All around is barren rock and rushing water. I spend the day sightseeing and preparing for a walk to Gaumukh. Water and dry foods are a must. (POLESTAR: 46) (翌日の輝く陽光のなか、その美しい村は私の前に姿を現した。視界中央のすぐ下には印象的な滝がある。ガンゴトリー寺院は灰色と赤という素朴な色彩で目を引く。周りは、荒涼とした岩石と勢いよく流れる水だけである。私はその日を、この辺の観光とゴームクへ歩いて行く準備に費やした。水と固形食品は必需品である。)

(7)は、視線の移動に気がつくとき、先に見たフィルムの1コマ1コマを追っていくような解釈が可能で

ある。なお、該当箇所には下線をつけてある。順に、「翌日の陽光のなか」「美しい村」「中央下には滝」「灰色と赤色の寺院」「周囲は岩石と川」と拾い読みをすれば、読み手のもつスキーマも手伝って大意はつかめると思われる。

3. 結語

人間の認知様式に基づいて言葉を考察することにより、言葉の深層にあるメカニズムが見えてくる。本稿では、認知言語学の知見を基盤に、lookを主要語とする句動詞を考察し、視線の動きをとらえることで数あるlookの句動詞の意味が容易に把握できることを確認した。また、移動を表す文は、移動物体・移動経路・移動時間の3要素に注意すれば、拾い読み程度で大意が把握できることを確認した。

このように、本稿で筆者が強調したいことは、英語教育の分野において、認知言語学から学ぶべきことは多々あるということである。

参考文献

- Dewell, R.B. (1994) "Over again: Image-schema transformations in semantic analysis," *Cognitive linguistics* Vol. 5-4, 351-380.
- Kawakami, S. (河上誓作) (1996) 「英文法と図解」, 『現代英語教育』11月号. 研究社出版, 24-27.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, Chicago: U of Chicago P.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, Chicago: U of Chicago P.
- Langacker, R.W. (1986) "An Introduction to Cognitive Grammar," *Cognitive Science* 10, 1-40.
- Langacker, R.W. (1987a) *Foundations of Cognitive Grammar* Vol.I, Stanford: Stanford UP.
- Langacker, R.W. (1987b) "Nouns and Verbs," *Language* 63, 53-94.
- Langacker, R.W. (1988) "A Usage-Based Model," in Brygida Rudzka-Ostyn (ed.), *Topics in Cognitive Linguistics*: 127-161. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R.W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. II, Stanford: Stanford UP.
- Okimoto, M. (沖本正憲) (1996) 「farとlongの

- 認知意味論的分析」, 『研究紀要』第13号, 北海道札幌月寒高等学校, 1-18.
- Okimoto, M. (沖本正憲) (2002) “*The Wind’s Eyes vs. *The Wind’s Teeth: NP’s N Constructions with Inanimate Nouns for NP and Human Body-part Terms for N,*” 『筑波英語教育』第23号, 筑波英語教育学会, 19-37.
- Onishi, H. and P.C. McVay (大西泰斗/ポール・マクベイ) (1996) 『ネイティブ・スピーカーの前置詞』研究社出版.
- Tanaka, S. and Y. Matsumoto (田中茂範/松本曜) (1997) 『空間と移動の表現』研究社出版.
- Yamanashi, M. (山梨正明) (1998) 「認知言語学の研究プログラム」, 『言語』, 大修館. 20-29.
- Yamanashi, M. (山梨正明) (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版.

引用文献

(POLESTAR) : 『Polestar Reading Course』数研出版, 2002.

(WP) 『ワードバル英和辞典』小学館, 2001.

(北海道札幌月寒高等学校教諭)